愛知工業大学研究報告
第３２号Ｂ　平成９年

黄檗宗地方末寺の江戸時代後期の本堂形式
－南勢・相可の法泉寺の法系を中心として－

A study on the style in the small temple's main halls,
a branch genealogy in Obaku Zen sect,

岡野　清
Kiyoshi Okano

A study on the style in the small temple's main halls, a branch genealogy in Obaku Zen sect,
About the last stage in the Edo period, in south Ise district.

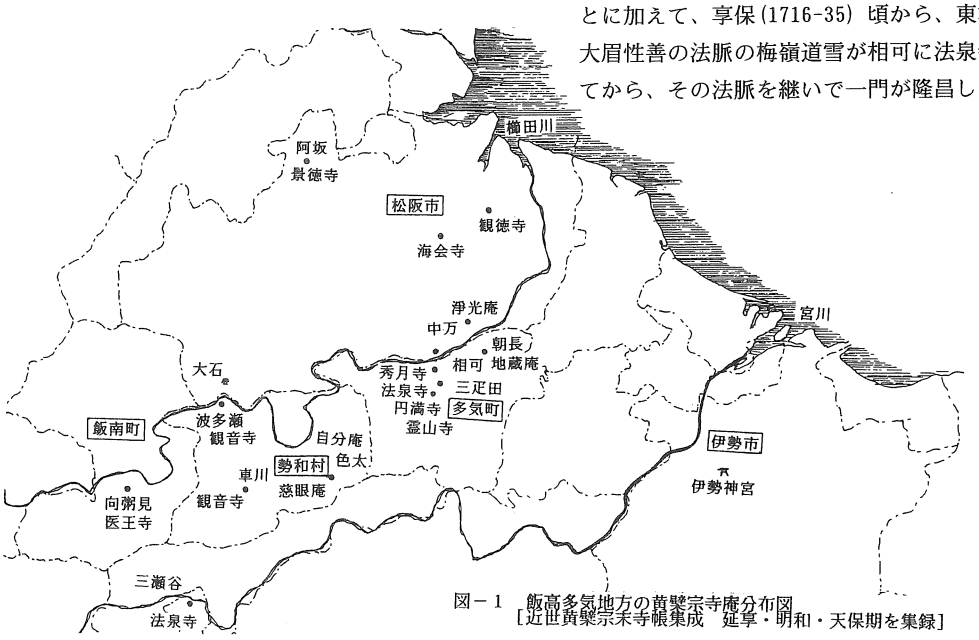
【はじめに】

地方の黄檗宗寺院は、主にその土地の藩主が開基して、単独で保持してきたのが一般的である。しかしここに一つの地域に法系が集中して群をなしていた土地がある。

三重県内の黄檗宗寺院は、近世末期の記録[1]では34ケ所にあるが、そのうち15の寺院が多気・飯高地方にある。松阪付近の４ケ寺を除けば、現在の多気郡内の櫛田川と宮川支流濁川沿いにあって、相可の法泉寺の法類で群をなしている。

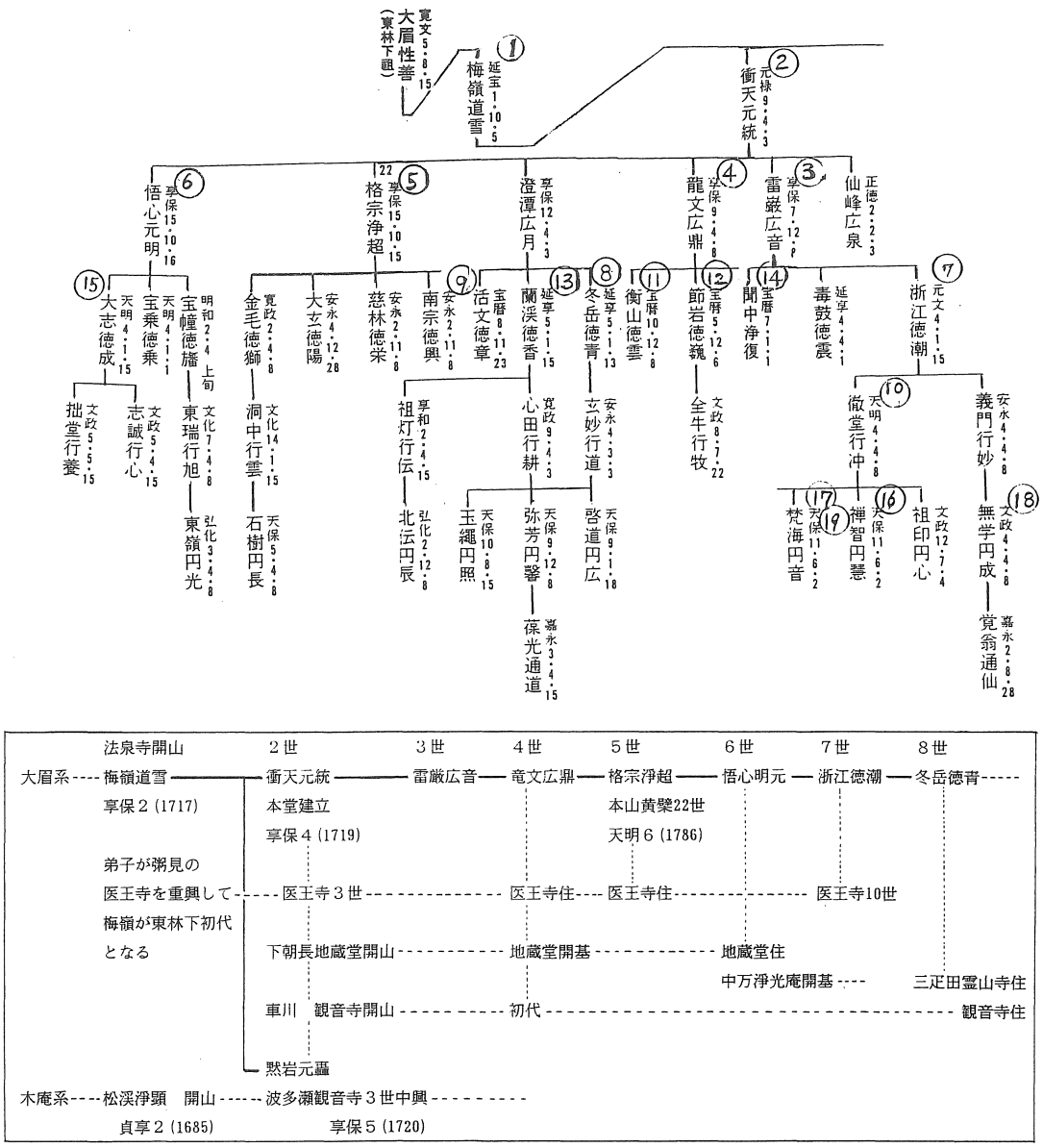
寛文年間(1661-72) 以降は、山城国宇治・万福寺を中心として近隣地域の山城や摂津・河内から大和にかけて、新宗派・新寺院の開創が困難な下にもかかわらず、短期間に寺を創立しながら教団が拡張されてきた。これには幕府をはじめ、大名・公卿・地方の上層階級の有力者の財政扶援を得るだけの魅力が、宗教上だけでなく、思想・芸術・薬医学・料理・茶道等、広い範囲で新しい中国文化を得られることにあったと思われる。

この地方には関西地方の影響を受けてか、早くも貞享から正徳頃(1684-1715) までには既に、木庵性派の一門の法脈によって４ケ寺が開創していたことに加えて、享保(1716-35) 頃から、東林下系統の大眉性善の法脈の梅嶺道雪が相可に法泉寺を開山してから、その法脈を継いで一門が隆昌し、近隣に法



図－１　飯高多気地方の黄檗宗寺庵分布図
［近世黄檗宗末寺帳集成　延享・明和・天保期を集録］

愛知工業大学　建築学科（豊田市）



図－２　享保(1716)以降、大眉性善（東林下）系の梅嶺道雪が開山した相可の法泉寺一門の法系図
［黄檗文化人名辞典・櫛田川と多気町文芸史より集録］

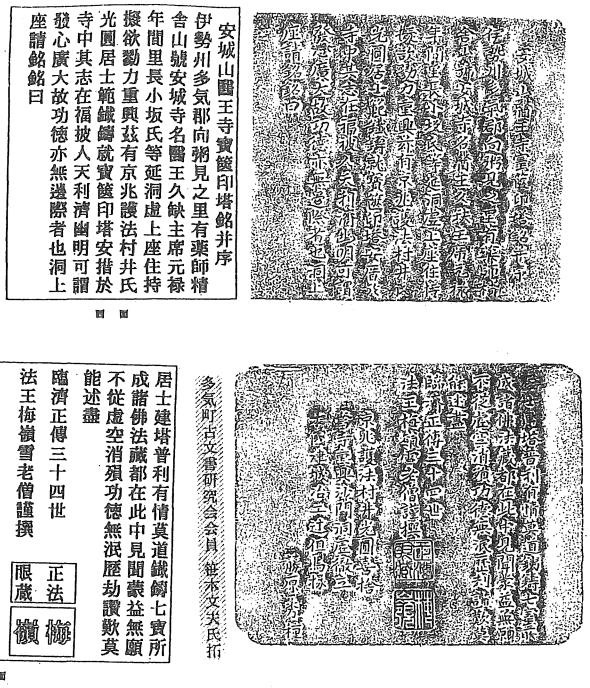
類が増えて、ここに黄檗の教団が多気郡に定着した結果になっている。その裏には元禄以降、江戸の経済成長に乗って、地元である飯野郡射和と櫛田川対岸の多気郡相可や上方の豪商の扶援があったものと思える。

正徳以前（～1711）にこの地方にあった木庵系の寺院[2]は、①＝貞享２年(1685)多気郡波多瀬の観音寺に木庵系の潮音道海（緑樹下系の祖）の一門である慈峰元俊の弟子の松渓淨顕がこの地に来て五間四面の堂を建てたのに始まるが、後無住となって荒廃していたものを３世黙岩が入寺して復興した時は法泉寺系統で梅嶺道雪の法弟であった[3]。

②＝元禄６年(1693)木庵性瑫の弟子廓山道昭が開山した阿坂の景徳寺があり、廓山はまた安濃郡殿村の願応寺も正徳の頃には開山している。

③＝黄檗２世木庵性瑫系の慧極道明（聖林下系）が勧請開山となった垣鼻の海会寺（年代不詳）がある。

④＝向粥見の医王寺は元禄(1688-1703)頃には黄檗僧洞虚和上が入寺していた。開基は京都の薬剤商とも摂津の医師とも伝える村井光圓で、本堂前の宝永３年(1706)建立の法篋印塔に鉄鋳物の埋込銘があり、光圓はこの地方の黄檗寺院を外護し、後に享保５年(1720)波多瀬の観音寺も再興している[4]。



図－３　医王寺宝篋印塔の鋳銘

【多気郡に遺る江戸時代後期の黄檗宗本堂】

Ⅰ．仏殿型本堂

多気郡相可　　旧法泉寺本堂　享保４年(1719)

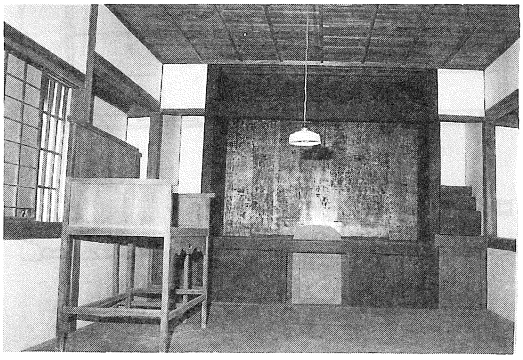
多気郡波多瀬　　観音寺本堂　享保５年(1720)

法泉寺・観音寺とも櫛田川の近くにあって、入母屋造・重層屋根・平入りで向拝を付けず、堂の前面１間通りは吹き放しの土間として前庇に垂木下を見せる。また主屋の柱と庇柱を水平梁で繋ぎ、礎盤は腰が高い黄檗型としている。正面中央間の入口扉は桟唐戸を用いる。

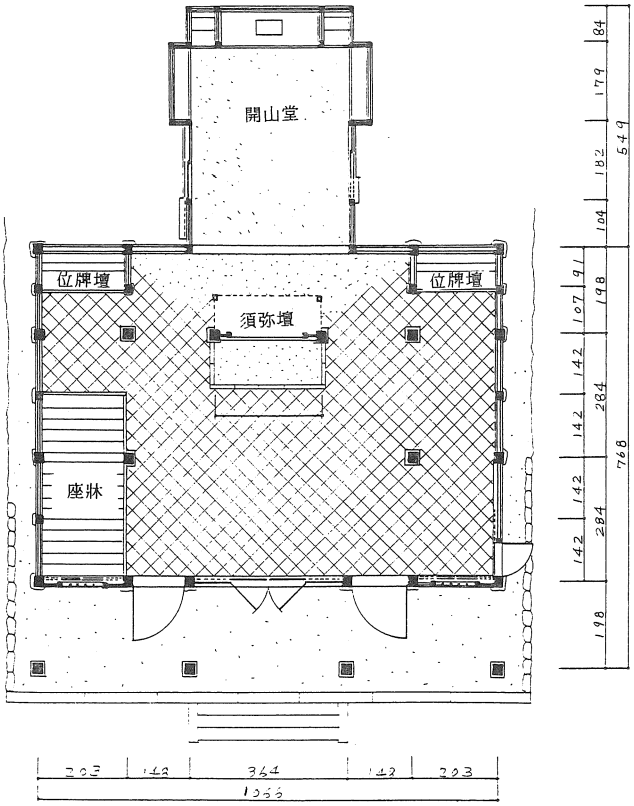
堂内は一室の土間で、側面に座床が付く。来迎柱は几帳面取角柱で仏龕を作って本尊は壁の後方に張り出す。来迎壁前に設けた檀は箱型。堂の後端に一直線の横並び仏檀を設けて開山堂や位牌檀とする。

黄檗型仏殿の基本型をなす堂で、法泉寺の方が法類の中核をなす開山梅嶺道雪が享保４年(1719)に建立しただけあって、主堂の間口６間、奥行４間は同規模であるが、後方に張り出した開山堂（後補か）は、実長３間分角屋となっており、後端の檀下に墓石を見せている（写真２・３）。背面板壁は金箔置きで位牌檀としている。

写真－１　旧法泉寺本堂外観

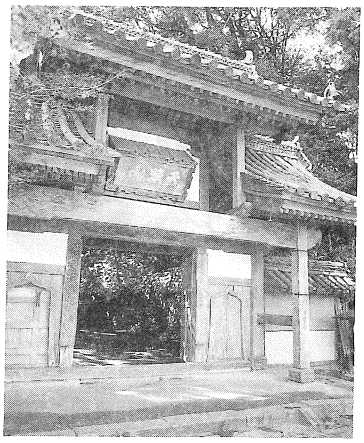


写真－２　旧法泉寺本堂開山堂内部

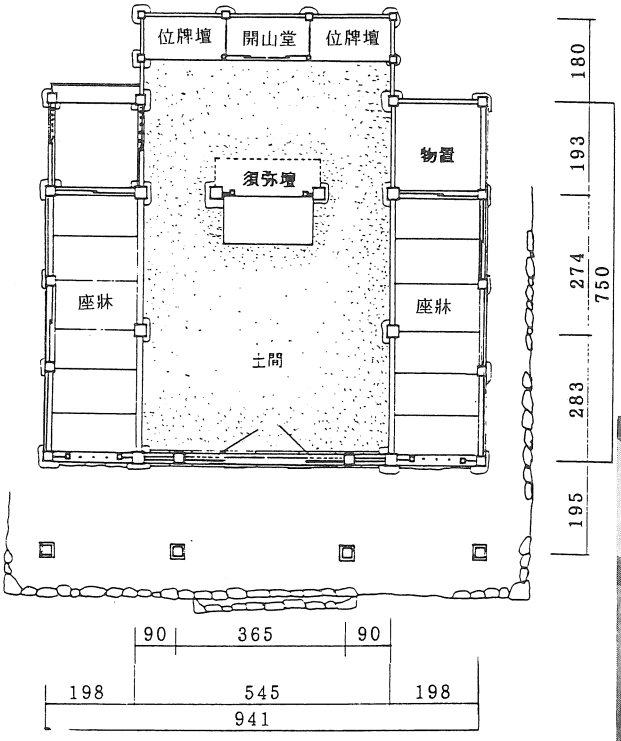


図－４　旧法泉寺本堂　現状平面図
［多気町相可］　享保４年(1719)

写真－３　旧法泉寺本堂背面

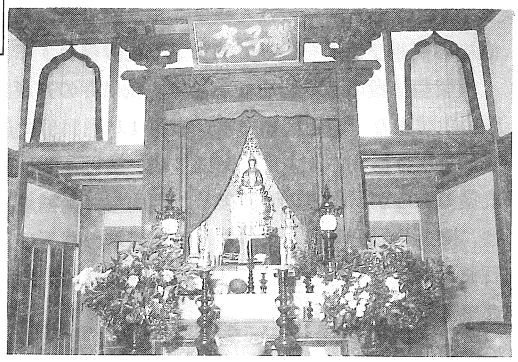


写真－４　旧法泉寺山門



図－５　観音寺本堂　現状平面図
［勢和村波多瀬］　享保５年(1720)

写真－５　観音寺（波多瀬）本堂外観



写真－６　観音寺（波多瀬）本堂内部

Ⅱ．方丈型本堂

阿坂　　景徳寺本堂　安政１～文久２年(1854-61)

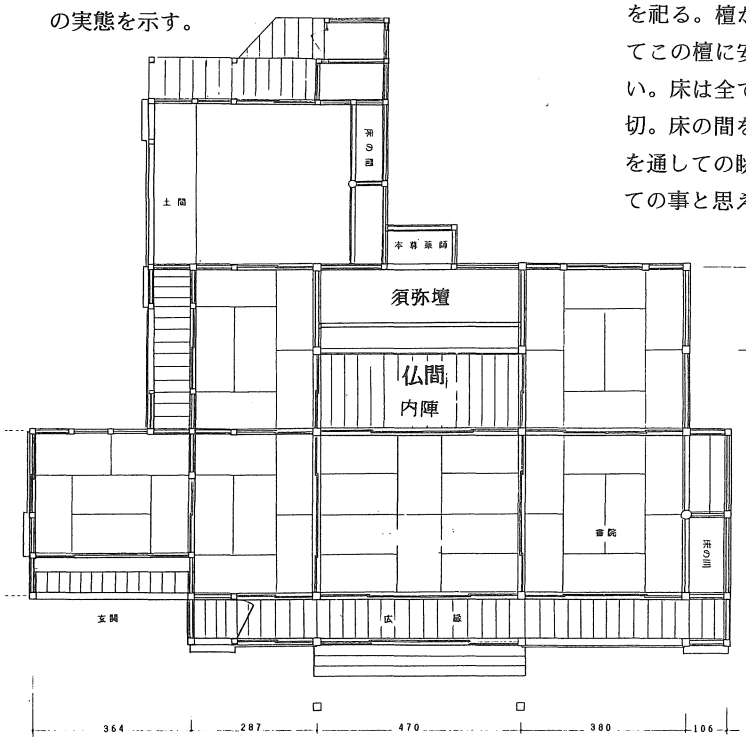
車川　　観音寺本堂　18世紀前期

粥見　　医王寺本堂　大正３年(1914)

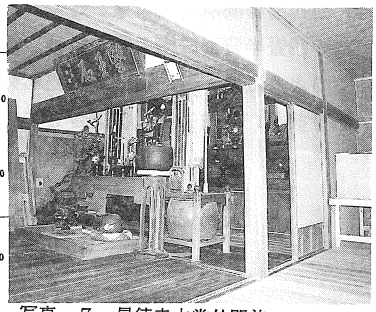
地方の末寺やその堂庵では、仏殿型の黄檗本堂を建てるまでもなく、他宗の小型寺院がそうであるように一棟万能の堂庫裡型に本尊を祀った形式と、方丈型にした本堂に庫裡・玄関を付帯した形式であったようである。この地域に現存する方丈型本堂にその実態を示す。

それらは方丈型整形六間取の基本形で、中央奥の間を仏間として本尊を安置する。上記３例では何れも庫裡が別にあるので住居部分はなく、床の間つきの接客空間と位牌檀を設けて開山堂・位牌堂を兼ねる。

景徳寺本堂(1857-61) は先々代から無住の寺で、旧態が最もよく分かる遺構。臨済宗系の黄檗であることから、当時の臨済系方丈型のように仏間の奥に横一文字の二段型須弥檀を設けて中央に本尊薬師像を祀る。檀が広いので、開山像・客仏・位牌等も全てこの檀に安置しているので位牌ノ間は別に造らない。床は全て同高とし、部屋境は全て襖引き違い仕切。床の間を手前右につけているのは、広縁と前庭を通しての眺望が松阪と伊勢湾を見降す景観を考えての事と思える。

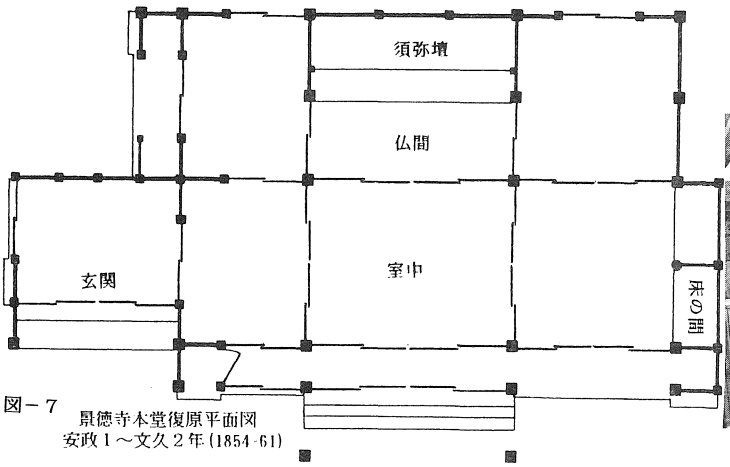


図－６　景徳寺本堂　現状平面図
［松阪市阿坂］　安政元年～文久２年(1854-61)

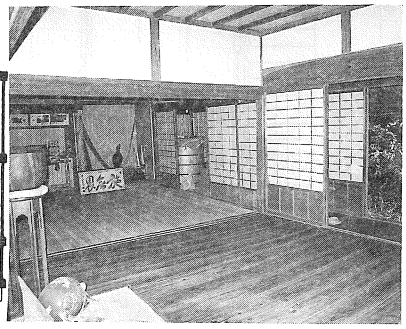


写真－７　景徳寺本堂仏間前

写真－８　景徳寺本堂須弥壇



図－７
景徳寺本堂復原平面図
安政１～文久２年(1854-61)

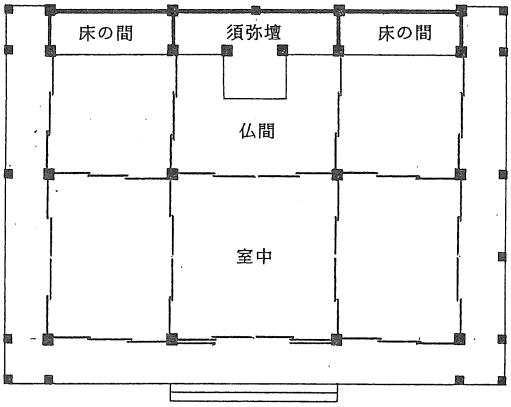


写真－９　景徳寺本堂
南の庭に面した書院

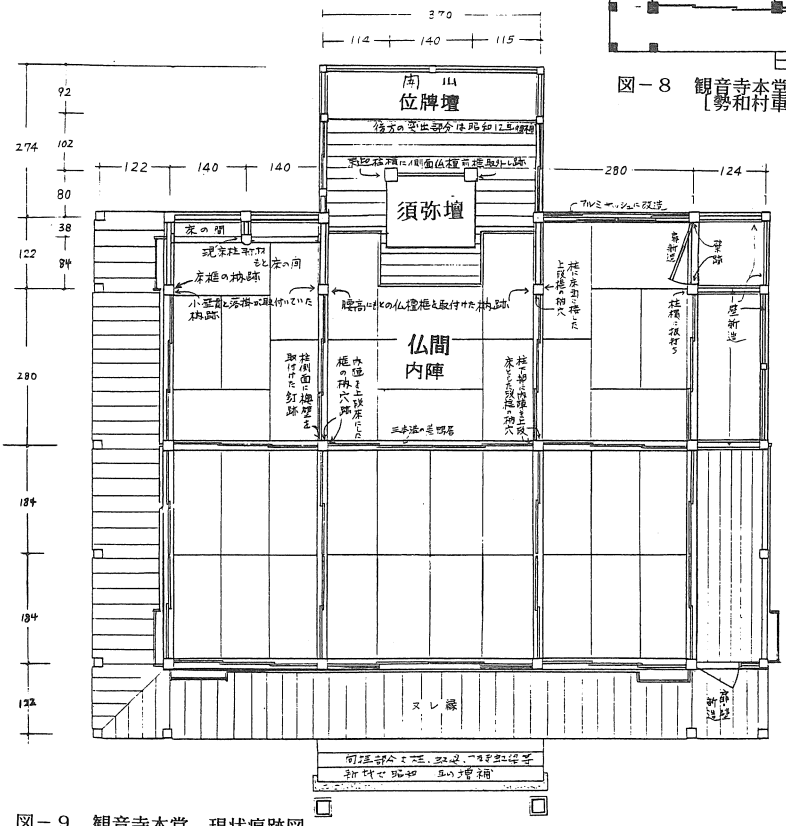
観音寺本堂（18世紀前期）は、法泉寺２世・衝天（享保５年·1720 寂）が開創して、後に法泉寺の隠居寺にもなっていた。村の集会所にもなっていて、もと茅葺きであり、向拝はなかった。現在はその後の幕末の頃の形態に改造されていて、向って右の床の間は無くなって、そこは六畳間となっている。仏間は後方に拡張されて須弥壇を撤去して１間後退して旧檀前の角柱を来迎柱にした独立した須弥壇となった。須弥壇と一体となっていた開山壇・位牌壇が無くなったので、後方に張り出した背面に一直線の檀を設けて開山堂としたので、間取りは土間式の仏堂型に近づいた。仏間の床は一度太い框一段分上段になっていた跡があるが、現在は全て同高にしている。

当初は曹洞宗小型本堂と類似したもので、内陣左右の四畳半背面に床の間を付け、須弥壇は臨済系本堂のように横一線に通っていたもの（幕末建立の景徳寺参照）を撤去又は後退させている。

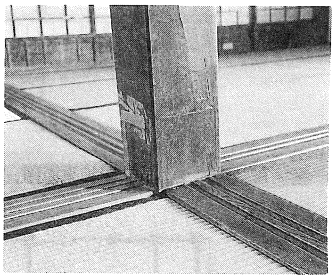
写真－10　観音寺（車川）本堂外観



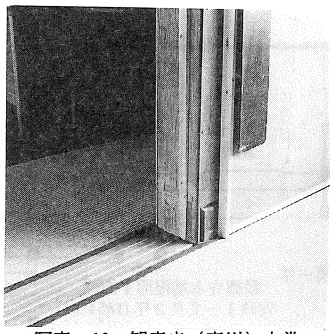
図－８　観音寺本堂　復原平面図
［勢和村車川］　18世紀前期



図－９　観音寺本堂　現状痕跡図
［勢和村車川］　18世紀前期



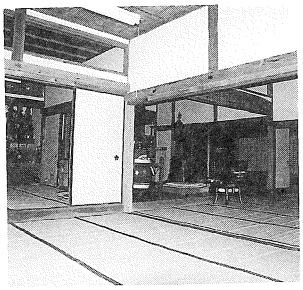
写真－11　観音寺（車川）本堂
仏間の床高を上段にした後
下げた跡

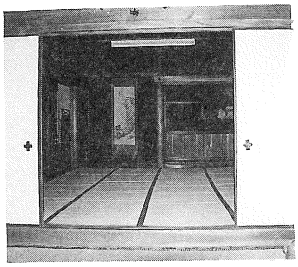


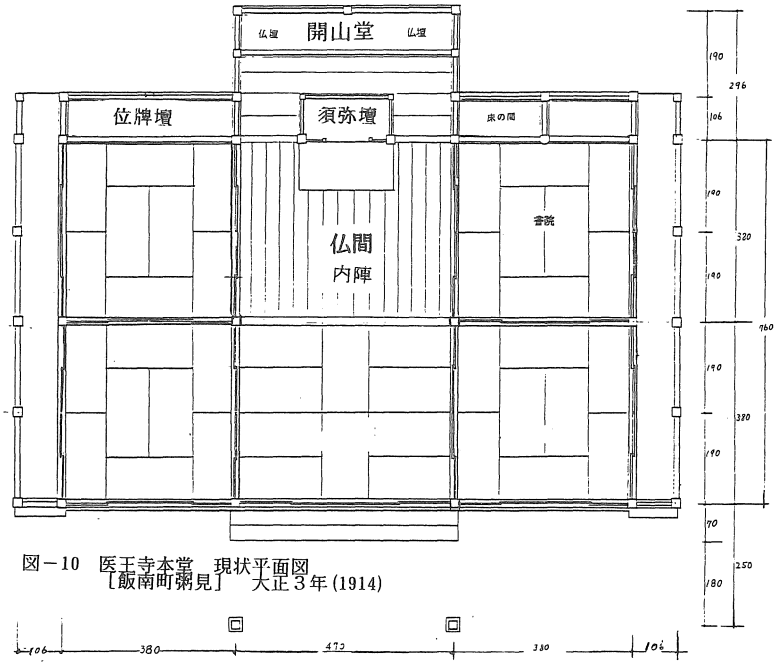
写真－12　観音寺（車川）本堂
床の間を取り外した跡

医王寺本堂（大正３年）は最も成長した形で、地方の曹洞宗の方丈型本堂に似ている。この地方では左右両方の奥の間に床の間を設けるのが一般的であるが、この堂は向って左の奥の間を位牌壇や開山を祀る檀としている。間取りは方丈型六間取の基本型であるが、この時代になると仏間とその両脇の座敷は上段床となって曹洞宗本堂とは異なっている。

写真－13　医王寺本堂外観


写真－14　医王寺本堂内部


写真－15　医王寺本堂書院



図－10　医王寺本堂　現状平面図
［飯南町粥見］　大正３年(1914)

【むすび】

黄檗宗本堂は地方の藩主や公卿等、身分の高い有力者が檀越となって勧請した仏堂型の堂としていたのが一般的で、寺はその地域に密着した教団を組んで群をなしている事は少ない。

伊勢の多気地方には法泉寺を中心に法類が作られており、末寺の本堂になるとこの地方の臨済・曹洞宗の方丈型本堂と基本的には一致するが、終極には仏間の床を上段としたり、仏間の奥行を深めて独立した箱型須弥壇や角柱の来迎柱を用いている点などこの地方の黄檗型須弥壇廻りの特徴が顕われている。

写真－16　医王寺本堂須弥壇

［謝辞］　この稿を作成するに当たって、御当地の海住春弥・大森豊生・青木文子・下村登良男諸先生には大変お助けを頂きました。深謝申し上げます。

註１）　近世黄檗宗末寺帳集成　竹貫元勝編
２）　黄檗文化人名辞典　大槻幹郎他
３）　櫛田川と多気町文芸史　海住春弥
４）　医王寺宝篋印塔と洞虚和尚　〃

（受理　平成９年３月21日）